



## 教育現場の行き先 外国人児童数の増加

**文**部科学省の調査で、全国の公立小中高校などに在籍する外国人児童生徒のうち、日本語指導が必要なのは全体の約40%にあたる29,198人で近年、増加している。母語別では、ポルトガル語が約30%、次いで中国語22%がつづいている。ただ、学校現場において、日本語指導を受けていたのは約80%程度。指導が必要な子が5人未満の学校が多く、指導体制をどう確立するかが課題となっている。（2015年07月20日読売新聞参照）

この現状は、地域によって格差はあるものの増加していることに対して、現場が対応しきれない状況がある。ただ、日本語教育に関しては、何も外国人の子どもだけの問題ではなく、日本人の子どもに対しても課題が増えつづけている。日本人の問題から言えば、社会、学校、家庭環境がこの20年で大きく変わったことにある。生活ツールとしてのデジタル機器が運んでくる情報に対して、処理しきれない、依存してしまうという傾向が大人のみならず、子供にも浸透している。デジタル化していく社会は経済という言葉によってのみこまれてしまっている。そのため、変化していくことは難しいが、学校を含めた教育機関、家庭においては、大人の意思によって変化させていくことは可能である。

このデジタル問題が加速化することによって、学校、家庭において本来、学習しなければいけない日本語を学習できていないことが日本の子どもたちの日本語力の低下、日本語で表現がうまくできない状況を招いている理由のひとつではないだろうか。

現在の日本語学習教育の課題をふまえつつ、外国人の子どもも含めて、どのような日本語学習教育を現場はおこ

なっていくかが大きな課題である。ただ、現場においては、すでに革新的に動き始めている状況もある。学校、民間教育機関（塾）などでは、小学校低学年を中心に日本語で「読む」「書く」「表現する」を基軸に指導を強化しているケースが増えている。家庭学習の場においても、親御さんが意識的に「子どもに考えさせる学習」をすすめることも年々増加。社会全体を大きく変えることはできなくても、個々が意識して変えていくことは可能である。子どもたちが大人になる10年、20年後、待ち受ける社会に対して、しっかり向き合い、生きていける力を準備させることが各現場において、今、求められていることではないだろうか。（北岡）

## 教育現場の行き先 キャリア教育を考える

**文**部科学省は、この数年「キャリア教育」を推進している。映画「HERO」とのタイアップ（平成27年8月公開）などを行っていたことから教育の現場にどう「キャリア」の考え方を浸透させていくのが課題であることが伺える。（ここ数年、映画とのタイアップがつづいている。）

文部科学省は「今、子どもたちには、将来、社会的・職業的に自立し、社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現するための力が求められています。この視点に立って日々の教育活動を展開することこそが、キャリア教育の実践の姿です。

学校の特徴や地域の実情を踏まえつつ、子どもたちの発達の段階にふさわしいキャリア教育をそれぞれの学校で推進・充実させましょう。」（文部科学省HPより）

学校現場においては「体験」をキャリア教育のひとつとして位置づけ、文化（歴史建造物などの見学など）、社会（職業体験・工場見学など）をテーマに体験学習をおこなっている。最近では、社会・地域貢献をテーマにボラン

ティア学習を積極的におこなっているケースもある。また、キャリア教育の必要性を子どもたちになげかけた「13歳のハローワーク（幻冬舎）」は、全国8000校以上の小・中・高等学校で教材や参考図書として採用されている。

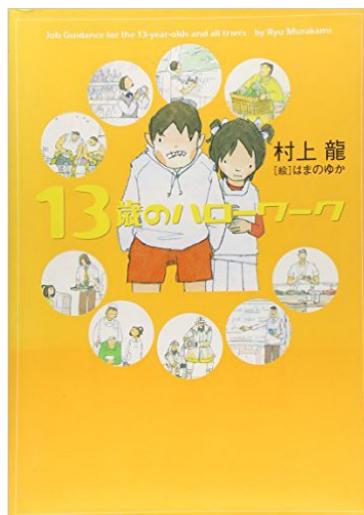
キャリア教育を推進していく中で、課題は「体験」で終わってしまうことにある。梨狩りに行って、梨をとって食べて、「おいしかった」といって終わってしまうことにある。理由は、このキャリア教育に対してのカリキュラムや時間が不足していることである。この問題を解決するには、キャリア教育というより哲学・教養という科目をつくり、週に3回ぐらいおこなう必要がある。「キャリアとは？」

「働くこととは？」「生きることとは？」などの疑問に関して“知”を深める学びが必要であると私は思う。海外の教科書などを見ると高校生あたりになると「哲学」だけの教科書が存在する。日本では、社会（世界史・公民）の一部におさめられている状況である。

「哲学」「教養」というと難しい、よくわからないと思われる。理由は、難しい言葉を使って、過去の哲学者の言葉を用いていることが理由のひとつであると私は思う。今、社会が個人がかかえている課題に対して、どう向き合い、思考し、問題を解決していくのが「哲学」「教養」という学びを深める入口ではないだろうか。その上で、過去の哲学者たちが残した言葉というのが生きてくる。

情報社会が加速化していく中、子どもも大人も、目と目をあわせて、膝と膝を付き合わせながら対話することが、キャリア教育の底上げになるのではないだろうか。

(北岡)



13歳のハローワーク  
村上 龍 (著)  
ページ数:455ページ  
出版社:幻冬舎  
(2003/12/2)

## 学習教育の行き先

### キーワードは文法

**学** 林舎は、12月に小学校国語文法に的をしぼった「成長する思考力GTシリーズ国語 文法力特化」(2016年新刊)を先行販売致します。

この教材を制作した理由のひとつに、大人も含めて私たち日本人は日本語という言語を構造的に理解しきれていないことが、今日の「日本語力低下」につながっているのではないかと考えたからです。これは、日本語のみならず英語でも問題になっているのですが「聞く」「話す」ことはできても「読む」「書く」「表現する」ということができない状況があります。学習現場でも「読む」「書く」「表現する」学習力をどう高めるかが課題のひとつです。

「成長する思考力GTシリーズ国語 文法力特化」は、「文法」に焦点をあてた教材であり、文法という視点から「読む」「書く」「表現する」学習力を強化、支えるための教材です。

内容構成はGT国語、要約力特化と同じ4ページ1回構成になっています。「文法を理解しよう!」「言葉の知識を広げよう!」「文を作ってみよう!」「理解をたしかめよう!」の4つのテーマです。



成長する思考力GTシリーズ国語

## 文法力特化

版型 ● A 4 版  
頁数 ● 32頁  
価格 ● 849円+税  
学年 ● 小学校～中学校  
付属 ● 解答・解説

### 目次

第1回	主語と述語	第6回	助動詞
第2回	修飾語	第7回	敬語1
第3回	品詞の種類	第8回	敬語2
第4回	名詞・動詞	第9回	表現技法1
第5回	連体詞・接続詞	第10回	表現技法2

GT国語、要約力特化とあわせて、日本語力を強化する教材としてご活用ください。(北岡)

# 国語を 考えてみる

文/学林舎国語顧問 森本 秀俊

## ああ、素晴らしき哉、日本語⑱ - 豊かな表現は世界を幸せにする

**先** 日、テレビでクイズ番組を見ていました。5人の解答者が全員で1つの解答をつくるというクイズで、次のような問題が出されました。はっきりとした文は忘れてしまいましたが、「～しているんだ、ぼくは」のように、言葉の順序を入れかえて、印象を強くする表現の方法を何と言いますか、というような問題でした。答えはもちろん「倒置法」で、ひらがなで一人が一語ずつ答えるので、「とうちほう」となるべきでした。その問題に挑んだのは、芸人3人と作家が2人という解答者でしたが、出てきた解答が「とうくほう」で、そのチームは不正解となりました。そして、「く」を書いたのが、芸人ではなく作家だったので、「本当に驚きました、私は」。

日本語には、この倒置法のほかにも「比喩」「擬人法」「対句」「省略」「反復法」「体言止め」「呼びかけ」という言葉を印象づける表現の方法があります。これを表現技法といいます。その主だったものを簡単に見てみましょう。

### 【比喩】

たとえを使って印象を強める表現技法で、直喩と隠喩の2種類がある。

#### ①直喩

「～のような」「～のように」などの言葉を使ってたとえる方法。

#### ②隠喩

「～のような」「～のように」などのたとえの表現を使わない方法。

### 【擬人法】

人でないものを人のようにたとえる表現技法で、比喩の一種である。

### 【対句】

対になる言葉を並べて、調子をととのえる表現技法。

### 【倒置法】

言葉の順序を変えることによって、感動を強く表す表現技法である。

### 【体言止め】

行の終わりを名詞で言い切る表現技法。強い感動をあたえたり、しみじみとした余韻を残したりする。

小説を読んだり、人と話をしていたりするとき、豊かな表現に出会うと、なんだか得をした気分になります。次にあげるのは、すべて宮沢賢治の小説からとった比喩表現です。

「たくさんの星の集りか一つの大きなけむりかのよ  
うに見えるように思いました」

「クラリオネットのようなすすり泣きの声をあとに、  
急いでそこを立ち去りました」

「顔の紺色な髪の火のようなきれいな女の子がまっ  
白なひらひらしたきものに宝石を一杯につけてまるで  
青や黄色のほのおのように踊って飛び出しました」

表現のくふう一つでその言葉の持つイメージが読む人の頭の中いっぱい広がっていく感じがします。人と会話をしていても、表現の豊かな人と話していると、「ああ、この人はすてきな人だなあ」と思ってしまいます。「あのサスペンス映画はどうだった」ときいて、「すごく衝撃的だったよ」と言われるより、「うたた寝をしていて、突然、うしろからハリセンで頭を思い切りはたかれたような衝撃を受けたよ」と言われたほうが、引き込まれますよね。たかが表現技法、されど表現技法。表現技法についてもっと知りたいと思いませんか。

ああ、素晴らしき哉、日本語。(つづく)

# 算数・数学から見える世界

文／学林舎算数・数学顧問 深見 和孝

「数学的表現力」と聞いて、みなさんはどのようなことを思い浮かべられるでしょうか。「表現力」という言葉は馴染みのあるもので、音楽や絵画など芸術の分野でよく使われますし、フィギアスケートの選手はよく「表現力が素晴らしいですね」と褒め称えられます。そこで、「表現」と「数学」をくっつけて、「それは数学的表現に欠けるね」とか「キミは数学的表現力に優れているね」なんて言うと、なんとなくカッコいいですね。しかし、一般に「数学的表現力」なんて言葉を使うことはありそうにもなく、私自身、数学の授業にあたって「生徒に数学的表現力を身につけさせよう」とか、「数学的表現力を高める問題を作ろう」などと特に意識したことはありません。

数学教育の世界において、表現力という見方が強調されるようになってきたのは最近のこのように思います。それというのも、「問題の解き方を覚えさせるだけではダメだ。数学を実生活で生かせるような数学教育を目指すべき。」という方向への合意ができてきたのではないのでしょうか。公立高校の入試問題でも、「表現力」を意識した記述式の問題が増えてきているようです。

また、学習指導要領では、中学数学の学習目標として、次のように記されています。

〈数学的な表現や処理の仕方を習得し、事象を数理的に考察し表現する能力を高める〉

前半部分の〈数学的な表現や処理の仕方を習得〉は、教科書に載っている記号の使い方や問題の解き方を自分で書けるようにしようということでしょう。たとえば、中学1年で「比例」という単元があり、ここでは次のような問題があります。

【問題】 $y$  は  $x$  に比例し、 $x=3$  のとき  $y=6$  となります。

このとき、 $x$  と  $y$  の関係を式に表しなさい。

この問題を教科書通りに解くと、次のようになります。

【解き方】 $y$  は  $x$  に比例するので、 $a$  を比例定数とすると、 $x$  と  $y$  の関係は  $y=ax$  と表せる。

この式に  $x=3$ 、 $y=6$  を代入すると、

$$6 = a \times 3$$

これを解くと、 $a=2$

よって、 $y=2x$

多くの生徒にとっては、こういう数学的な解き方がまどろっこしくメンドウに思えるものです。といいますのも、「6 ( $y$ ) は 3 ( $x$ ) の 2 倍だから  $y=2x$  で OK」と答えは簡単に求められそうです。ただ、教科書には、「 $x$  と  $y$  の関係が  $y=ax$  で表されるとき、 $y$  は  $x$  に比例するという」と数学的表現が書かれていて、それを土台にした処理の仕方をするならば、上のような解き方が真っ当であるというわけです。私が中学1年生に数学を教えるときは、こういう解き方を書けるようにするだけで四苦八苦します。

学習指導要領によれば、それに加えて、〈事象を数理的に考察し表現する能力を高める〉ように指導しようというわけです。あれもこれもと、教える方は大変です。この場合の〈事象〉というのは、たとえば、「石油ストーブを使ったときの灯油の減り方」のようなもので、それを〈数理的に考察する〉には「ちょっとずつ減っていくだろう」ではダメで、「ストーブの使用時間と灯油の減る量の関係」を表やグラフにして、その特徴からわかること、わからないことを見つけるわけです。それを〈表現する〉には、考察したことを整理して、他人が見てもわかるようにレポートに書いたり説明をします。結果、「灯油の減る量は使用時間に比例するのだな」と、生徒が「比例」に馴染むことができれば大成功。

要は、「 $y$  が  $x$  に比例する」という表現をどれだけ身近な言葉や概念にできるか、ということが目標になるでしょう。数学そのものが記号を使った表現ですから、表現力をともなわない数学なんてありえないともいえますが。

このように言うは易しですが、行うは難し。次回のコラムでは、もっと具体的に数学的表現力を探ってみたいと思います。(つづく)

# クロスロード Crossroad

第51回 文／吉田 良治

## 準備

先月ラグビーワールドカップにおいて、日本代表が強豪南アフリカを破る大金星を挙げました。試合直後、世界中のラグビー関係者は、南アフリカが日本に敗北したことに驚愕し、破った日本へ称賛の嵐が巻き起こりました。どのスポーツの世界でも、まず10回やったら10回負けるという力関係の試合はあります。ランキングが物語るように今回の南アフリカと日本の間には、そんな力関係が合ったのでしょうか。特にラグビーの世界ではまず“Upset”（番狂わせ）が起こりにくいと言われています。フィールドでの体力の差が歴然としている場合、技量では中々挽回できないスポーツ、それがラグビーなのだと思います。技量やベンチワークでの差を活かす前に、フィールドでの力量の差で圧倒されるとなす術はありません。

よく似た競技にアメリカンフットボールがあります。こちらは私の専門ですが、元々はアメリカに移住したイギリス人が、フットボールとして持ち込んだ原型がラグビーでした。その後ルールが少しずつ変わり、サッカーの要素である前パスなどが活用され、現在のアメリカンフットボールになったのです。連続したプレーが特徴のラグビーと違い、アメリカンフットボールは1プレーごとにベンチから作戦が伝えられ、ベンチワークで勝敗が変わることもしばしばある、ゲームプランとアジャストのスポーツと言えます。しかし、どのようなスポーツでも試合に臨むまでの準備、それも明確な目標を立てて、計画的にプランニングできれば、ラグビーのような体力差で勝負が決まる、といわれるスポーツであっても、勝敗が変わる可能性は0ではない、と今回の日本の勝利から見てとれるのではないのでしょうか。それは南アフリカ戦の勝利後、チーム関係者の発言でも明らかです。

湾岸戦争の時アメリカ軍のトップとして指揮を執った、統合参謀本部議長コリン・パウエル氏の名言の一つ“*There are no secrets to success. It is the result of preparation, hard work, and learning from failure.*（成功の秘訣などはない。成功とはしっかり準備をし、努力をし、失敗から学ぶことで成し遂げるものである！）”にもあるように、今回のラグビーワールドカップで日本代表チームが成し遂げた快挙は、パウエル氏の成功のプロセス3つに集約されています。練習でできないこと、準備していなかったことが、本番の試合でできるわけがない！とよく言われます。スポーツに限らずあらゆる分野で言えることです。学校のテストも同じです。日頃勉強をせずにテストの時だけががんばっても成績は上がりません。毎日の積み重ねの上に成果があるのです。

また、準備には体力的なものだけでなく、内面的な準備も重要になります。つまり今回のラグビー日本代表でも注目されたメンタル面の強さです。試合に向けて十分に準備してきても、本番で力を発揮できずに終わることは、スポーツの世界でよくあります。あらゆるプレッシャーを撥ね退けて、自分の力を100%発揮できるかどうか、それまでの準備してきたことを出し切ることができるかどうかは、精神面の強さも大きく影響してきます。スポーツの成功の90%はメンタル、10%がフィジカルと言われるほど、こころ一番でメンタルを安定させることができるかどうか、これもスポーツで結果を出せるかどうかの大きな要素となります。常にメンタルを強く持ち続けるための準備も欠かすことができません。これは日本風の根性論とはまた違う精神修養が求められます。指導者の暴力や理不尽な振る舞いによる指導では培うことはできません。メンタル面90%を活かすかどうか、それは選手自身が心の底からやりたい！！という願望を持てるかどうかにかかっています。外からの力（体罰）は何の役にも立ちません。（つづく）

### 吉田良治さんプロフィール

1962年生まれ。1998年にワシントン大学へアメリカンフットボールコーチ留学。2000年リーグ制覇、2001年ローズボウルに出場し、ローズボウル制覇に貢献。国家レベルのリーダーシップ教育に貢献した、ランブライト元ワシントン大学ヘッドコーチよりリーダーシップ教育を学ぶ。

全米の大学で人格形成プログラム普及に貢献した、ライス元ジョージア工科大学体育局長よりライフスキル教育を学ぶ。

吉田良治さんBlog  
<http://ameblo.jp/outside-the-box/>